

## 安房妙本寺所蔵「宗祖一期略記 日我御記」

‘A Brief Account of the Life of Our Founder, Written by Nichiga’: A Document Housed at Myohoriji Main Temple

佐藤博信

SATO Hironobu

**要旨** ここで紹介する史料は戦国時代の安房妙本寺（千葉県安房郡鋸南町）の住職日我が日蓮宗の宗祖日蓮の誕生から死去に至るまでの一代記を日蓮遺文やその他の史料をもとに纏めたものである。妙本寺に伝来する日我の自筆本からの翻刻である。

### 【解題】

中谷山妙本寺は、千葉県安房郡鋸南町吉浜字中谷に所在する富士（日興）門流の日蓮宗寺院（通称保田妙本寺）である。その起源を鎌倉時代末期に持つ県内屈指の古刹で、宗祖日蓮本弟子六人（六老僧）の一人日興の孫弟子日郷を開山とする。現在は単立の大本山である。その所蔵される膨大な中世文書については、『千葉県の歴史資料編中世3（県内文書2）』（二〇〇一年三月）・『千葉県の歴史資料編中世5（県外文書2・記録典籍）』（二〇〇五年三月）にほぼ収録された。またそれを利用した研究も、不十分ながら佐藤の『中世東国日蓮宗寺院の研究』（東京大学出版会、二〇〇三年十一月）・『中世東国政治史論』（塙書房、二〇〇六年十月）などで纏められた。

近刊『千葉県の歴史通史編中世』（二〇〇七年三月）にも、一節「安房妙本寺と日我」（佐藤執筆分）が設けられた。かくてその存在は、名実とともに周知のものとなったといつてよい。

一方、所蔵される膨大な典籍（聖教）類については、堀日亨編『富士宗

学要集』に部分的に紹介されるに留まっていたが、これも近年様々な形で紹介されるに至った。例えば、拙稿「安房妙本寺本『当門流前後案内置文』」（『千葉大学人文研究』三十二号、二〇〇三年三月）・「正蓮百ヶ日忌日我談」（『千葉県史研究』十四号、二〇〇六年三月）、『興風叢書（2）法華本門開目抄聞書一生御立願十三箇条』（興風談所、一九九三年一月）・『興風叢書（7）安房妙本寺第十四世日我一流相伝大事私』（興風談所、二〇〇三年七月）・大谷吾道「日睿筆『類集記』について」（『興風』十八号、二〇〇六年十二月）などである。

ここでは、以上をうけて「宗祖一期略記 日我御記」（以下、本書と略す）を紹介するものである。本書自体は、すでに『富士学林教科書研究教学書第二巻』（富士学林、一九七〇年二月）に「大聖人一期事拔書」として堀日亨の書写本（影印）が収録されている。その奥書には、「以保田妙本寺蔵日我正本自写之、更令高芳（高野芳之）謄写略加朱訂了、昭和十三年八月廿五日 日亨（花押）」とみえ、また昭和九年（一九三四）三月十七日に「校

了」し、昭和十三年八月二十五日に「訂了」したとの捺印がある。ただ「我記委曲今省之」として省略された部分もあり、完全なものではない。ここで、全文翻刻する所以である。

本書は、妙本寺日我の自筆本（堀日亨師も鎌倉日誠師も自筆原本とされる）で、十四帖からなる和綴本である。最近表装し直されて題箋（鎌倉日櫻師執筆）が附された（写真を参照）。その元になったのは、幕末から近代に掛けて所蔵史料の総点検を行った山口日勸（明治四十年【一九〇七】十月十三日死去）による仮綴本である。内題の「宗祖一期略記 日我御記」と最後の「上 御仏前」は、その時の日勸の執筆と思われる。印章が三つ捺されており、本文の最後に捺された印は「釈日勸」と読める。その段階にすでに奥書の部分は、失われていた様である。それ故、日我の執筆の年月日は不詳である。ただ本文の最後に「日我先年諸御抄伝記ヲ引テ二百丁<sup>帖</sup>ホト二書立タル、籠城火事時焼失、無別本間不及力、用々計為旅中拔書之間、本文ハソラ二書所モ有之、殊急間損失可有之、以能本可有添削者也」とあるので、本書執筆の意図と内容及びその時期がほぼ推定される。

すなわち、「先年」に諸書を参照し「二百丁<sup>帖</sup>ホト二書立タ」ものの、「籠城火事時焼失」したので、その後の「旅中」の過程で「用々計」を改めて執筆したというのである。その「籠城火事時」とは天文二十二年（一五五三）七月十三日の著名な上総金谷籠城中の火災を指すので、「先年」はそれ以前ということになる。日我は、天文五年頃から精力的に著作に取り組んでいるので、その一環であったと思われる。その後、日我は、永禄二年（一

五五九）十二月十日の古辞書「いろは字」上下二巻の完成まで安房各地を小屋掛けして著作に専念したのであった。本書も、そのなかで纏められたものであった。「二百丁<sup>帖</sup>ホト二書立タ」書から「少々用々計拔書」の本書へとなったのである。成立年代は、天文二十二年七月十三日から永禄二年十二月十日までとみてほぼ間違いない。

そもそも、宗祖日蓮の伝記は、近年「室町初期の成立」にして大石寺日時の作（従来日道の作）と考証され直された「御伝十代」（鎌倉日誠師談。池田令道「大石寺蔵『御伝十代』の作者について」『興風』十六号、二〇〇四年十二月）を嚆矢にして、文明十年（一四七八）十月十三日成立の身延行学院日朝「元祖化導記」上下二巻、ほぼその頃成立の円明院日澄「日蓮聖人註画讃及抄」、永禄九年（一五六六）九月十二日成立の証誠院日修「元祖蓮公薩埵略記」などをへて確立したといわれる。特に日朝「元祖化導記」は、その画期をなすものと評価されている。本書にも「身延日朝モ上下二帖云々」とみえ、すでに周知の伝記となっていたことが知られる。本書の成立年代が天文から永禄年代とすれば、日朝「元祖化導記」に次ぐ時期の作品ということになる。

その点と絡んで、堀日亨師は、前掲書に朱書で「本書日朝元祖化導記之抄録歟、有文不合所、雖然非日我自著也、今煩不加朱訂也」と述べ、日我が日朝「元祖化導記」を典拠に執筆した可能性を指摘されている。ただ日我の本書執筆の基準は、まず御書Ⅱ日蓮遺文、次いで「或記」、そして「一、身延御出ノ事」の部分の様な「爰ヨリ中山・浜戸等ノ高祖ノ御縁起書付タ

ル書ヲ移也」という特別な書物、という順序であつた。当然ながら御書第一主義であつたのである。「或記」が具体的に何なのかは不詳であるが、その一書か否かは不明にせよ、「大聖人由来伝記」のみ具体名が記されている。この「大聖人由来伝記」は、康永三年（二三四四）二月九日付中山法華経寺日祐「本尊聖教目録」（前掲『千葉県の歴史資料編中世5（県外文書2・記録典籍）』）にみえる「大聖人御遺跡日記一卷」・「大聖人御事一帖」などの可能性も指摘されている（坂井法暉師談）。それは、また日我「当門流前後案内置文」にもみえる「大聖記」と同じであろうか。

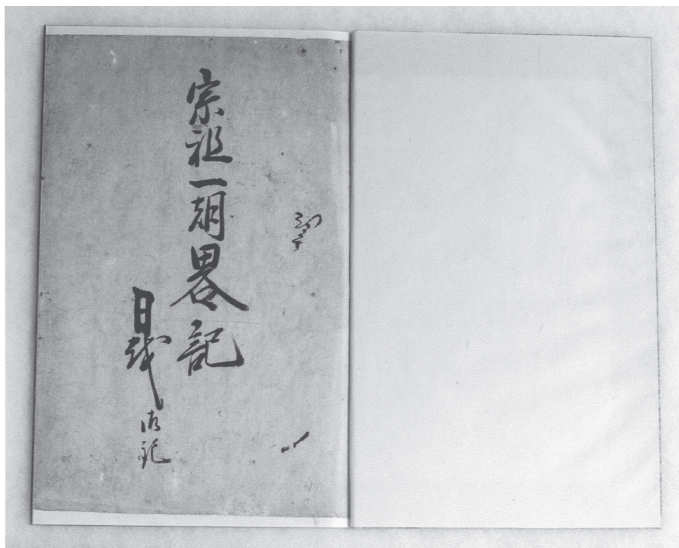
また本書執筆に際して、中山法華経寺・真間弘法寺関係の書物が積極的に利用されていたことは、注目される。「爰ヨリ中山・浜戸等ノ高祖ノ御縁起書付タル書ヲ移也」・「爰マテハ中山・真間何門中ノ聞書也、正本ハ浜土門徒ニ有之」と明記したり、「伝記ノ広本中山・真間等有之」と記している。それからすれば、先の「大聖人由来伝記」も、その関係の書物と想定されてもおかしくない。

このように中山法華経寺周辺の関連書物がおおいに利用されたことは、本書以外においても、確認されることである。例えば、日我「観心本尊抄抜書少々」（『富士宗学要集第四巻』創価学会、一九九一年七月）に「中山の聖教に本迹の法門記録抄と云ものに有之、日我当御抄拝見云々」とみえる。日我は、実際に間接か直接かは不明にせよ、中山本を何らかの形で「拝見」した経緯があつたのである。また日我「我邦雜記」（前掲『千葉県の歴史資料編中世3（県内文書2）』）にも「此事ハ諸門徒ニモ大聖根本記ト云

一帖ノ抄アリ、殊ニ中山等ニ有之」とみえる。

すなわち、こうした背景には、日蓮関係の聖教類のみならず関係書物が日蓮宗全体の共有財産化していた事情が存在しよう。御書一つに門流・門家を超えた磁力が存在したのである。その点で、中山法華経寺が南北朝期段階「経典類の宝庫」であつたことが改めて想起される（湯浅治久『中世東国の地域社会史』岩田書院、二〇〇五年六月）。

なお、本書の翻刻に当たっては、いつもながら妙本寺学頭鎌倉日誠師の御許可と御高配を賜った。また興風談所坂井法暉師からも種々御配慮をえた。併せ記して拝謝す。



【本文】

(題箋)「宗祖一期略記 日我御記」

大聖人御二期事、少々用々計拔書、日我

一、御書云、日蓮八日本国人王八十六代後堀河院御宇貞応元年壬午安房国長狭郡東条郷生、堀川八承久三年辛巳十二月一日即位十才、貞応元年壬午十月廿三日御禪十一才也、同十月廿三日大嘗会、天福二年甲午八月六日崩御、廿三「」記三元祖誕生ノ日二月十六「日」云々、可有口伝也、小湊誕生寺小堂有「之、日」華ト云中老衆開闢也、

一、御先祖八遠州ノ人、貫名五郎重実也、前代平家ノ一門也、平家没落ノ時房州へ被流、長男不知之、次男貫名次郎重忠ニ五人ノ子アリ、一藤太、二幼少ニシテ死去、三仲三郎、四元祖聖人、五藤平云々、御母平ノ畠山云々、父ハ妙日二月十四日、母妙蓮八月十四日逝去也、日蓮ノ

【妙興ノコト】

二字ヲカタ取玉ヘリ、入末法百七十一年高祖御誕生也、

一、御登山十二才御時也、八十七代四条院天福元年癸巳千光山清澄寺ニテ道善御房ニシテ学問云々、或記云、五月十二日御登山云々、清澄ハ慈覚建立也、本尊ハ虚空蔵也、明星池トテ有之、本地垂迹意趣、殊ニ高祖明星直見ノ本尊ト云習有之、又上総国フツトノ渡ニテ開悟アル共云ヘリ、追可習之、王代記云、四条院治十二年、後堀河長子也、貞応元年壬午十二月五日即位也、四条院三才ノ御時ト見タリ、

一、御出家事、御書云、延応元年己亥十八才出家云々、或記十月八日御出

家云々、延応八元年計ニテ翌年□□、

一、得名事、或記云、童名ハ藥王丸、御出家初ノ仮名ハ是生也、実名ハ蓮長、後改之日蓮中、以別涉可習之、

一、御学問事、御書云、其後十五年力間一代聖教惣シテ内典外典ニ亘テ無残見究云々、私云、十五年ハ延応元年己亥ヨリ建長五年癸丑至己上十五年也、其間四条・後サカ・深草己上三代也、一、学問精誠有之事、或記ニ從虚空蔵如意珠ヲ与玉ヘリト夢想ヲ蒙、願成就トテ遠ク趣他国ニ広ク学諸宗ヲ、南都北嶺・東寺・高野無殘伺之、宗々ノ淵底ヲ極玉フ云々、

一、学問御発心事、御書云、此度如何ニシテモ仏種ヲウエ、生死ヲ離ル、身ト成ラント思テ候シ程ニ、皆人願玉フ事ナレハ、阿ミタ仏ヲ頼奉テ幼少ヨリ名号ヲ唱候シ程ニ、イサ、カノコト有テ、此事ヲ疑故ニ一ノ願ヲ起シ、日本国ニ渡ル処ノ経并ニ菩薩論師ノ釈ヲ習釈候ハヤ、又俱舍宗・成実宗・法相宗・三論宗・花嚴宗・真言宗・法花宗・天台宗ト申宗共アマタ有トキクウエ、禪宗・浄土宗モ候也、此等ノ宗々枝葉ヲハ、コマカニ習ハストモ、所詮肝要ヲ知ルミトナラハヤト思ヒ程ニ、随分走廻リ二十六ヨリ三十五ニ至マテ廿五年力間、鎌倉・京・蘭城寺ト高野ト天王寺ト国々寺々荒々習身トリ成置ルホトニ一ノ不思議アリ、我等力ハカナキ心ニ推ルニ仏法ハ只一味ナルヘシ、何モ心ヲ入テ習□□、謗法ト申テ火坑ニ落入テ十惡五逆ト申、日々夜々ニ殺生偷盜□<sup>(邪)</sup>姪妄語等ヲ犯ス人ヨリモ、五逆罪ト申テ父母等ヲ殺ス惡人ヨリモ、



比丘ト成リテ身二百五十戒ヲカタク持、心ニハ万法蔵ヲ浮テ候ヤ  
 ウナル智者、聖人一生存間一惡ヲモ造ス、人ニハ仏ノ様ニ思ハレ、我  
 身モ又更ニ惡道ニ墜シト思ホトニ、十惡五逆ノ罪人ヨリモツヨク地獄  
 ニオチテ、阿鼻大城ヲ栖トシテ永ク不出地獄事候ケルヲ云々、イサ、  
 カコトトハ無記ハ、淨土宗ヲ習、還本山敬言玉フ、於念仏者ノ臨終不  
 二尊故捨之、其後律宗、其後禪宗、其後真言、其後天台宗經山門三井  
 送年月、於叡山相生ノ法橋「侍玉フ見タリ、旦那流ノ学者也、  
 其後自入經藏諸宗ノ元祖等違本經其科顯然也、依之邪正ヲ簡別シ化導  
 フ興玉ヘリ、一、御弘通発心事、御書ニ云、生年三十二ニシテ建長五  
 年癸丑三月廿八日、念仏無間業也ト見出シケルコソ時不祥ナレ、如何  
 カセン此法門ヲ云ハ、誰力可用、還可成怨○其外ノ余宗皆可墮獄由  
 一々記云々、或記云、於道善房持仏堂南面集一寺大衆念仏○南無○經  
 唱此旨談玉ヘハ、師匠モ座立、大衆驚キ去ル、此事國中風聞間、地頭  
 強盛ノ念仏者ナル故、忽ニ清澄寺ヲ擯出シ玉フ、然ニ聖人長狹郡四条  
 二越ヘ花房郷青蓮房ニ住シ玉フ、四条ノ地頭又念仏者タル故ニ、外ニ  
 ハ為堂供養導師奉請之、内ニハ欲殺害之也、其時聖人此事知セ申□□  
 □態ト趣<sup>(註)</sup>キ彼請至中堂御說法アリ、何婦シ無縁ノ弥陀違□□釈迦故  
 ニ、造堂ノ雖アミタ可墮阿鼻大城由無憚述玉フ、聞之人々色ヲ損了、  
 既欲奉殺害之処ニ、上人供養ノ旁大力ノ人多々ナル故、不及力逃シ申  
 シケル歟、仍上人御堂ノ縁ヨリ馬ニメサレ宿所ニ歸リ玉ヘリ、如此留  
 難不勝計、其後船而力マクラヘ御上有テ名越ノ小庵ニ住玉ヘリ、毎日

名越ノ山中ヘ入御有テ高声ニ首題ヲ唱玉ヒキ、建長八十八代後深草  
 御宇也、建長七年ニテ改易也、<sup>(聖人御難事)</sup>或御書ニ四、或義二潤三月歟云々、故  
 或三月共四月共書談候、私云、夏ノ比ト遊トキンハ三月ノ末ナレハ三  
 月ト得心テ宜歟、或御書云、午時此法門申初、今ハ廿七年云々、○シ  
 カト三月廿八日ト遊タル御抄有之、

一、奏状事、安国論是也、九十代龜山御宇制作也、後サカ第二子正元元年  
 己未十二月廿八日即位、十二才也、此論翌年正元二年庚申也、改文応  
 元年、最明寺道崇時頼ト云其時代也、弘長三年十一月廿二日三十七  
 テ死去ス、陸奥守重時法名觀覺極樂寺ト云、弘長元年十一月廿三日死、  
 時頼同時ノ人也、將軍八宗尊親王、執權時頼、使者八宿屋ニ衛門入道  
 也、高祖三十九才、文応元年七月十六日奏状也、皆念仏者ノ故不及御  
 沙汰、或記云、念仏者士引率数千人旦那、夜中ニ聖人御房押寄、既為  
 殺害御弟子能登公、進士大□蒙疵也、聖人多勢ノ中ヲ破リ、其夜ノ殺  
 害ヲ遁玉ヘリ、雖然夜打輩□<sup>(註)</sup>仏者等終ニ無罪過ヤミニキ、此等ハ鎌  
 倉名越ノ小庵ニテコト□□、

一、伊東御難事、御書云、年四十、弘長元年辛酉才、五月十二日ニハ伊豆  
 国伊東庄配流、伊東八郎左衛門尉ノ預ニ三ヶ年也、同三年癸亥二月廿<sup>+</sup>  
 二日赦免云々、是安国論奏状ノ故也、或書云、伊豆国伊東庄ハ七郷也、  
 七郷内ニ留津浦ニ着玉フ、卅日計住玉ヒテ、其後八郎左衛門宿所ノ近  
 辺ニ奉移、室形所ト申所ニ奉置三年ヲ経玉ヘリ、弘長二年正月ノ御消  
 息云、此間學問仕事浅ク廿四五年罷成、法花経ヲ殊ニ信シマヒラセシ

45

国已来亦将通中国至、朕躬而無一葉之便、以不通和好ヲ、尚恐王国知之未審故、將二遣使持書布先レハ、朕志ヲ冀クハ自今以往通門結好以相親、朕且聖人以四海為宗、不相通好豈一家之理ヲ哉、以至二用兵、夫熟所好、王其凶之不宣、至元□年八月日、或記云、牒状公家へ参着事、文永五年二月一日也、無返牒使ヲ被帰、彼牒使ツクシツ、浦々軍場委差図ヲ□□、文永十一年十月五日卯時ツシマ国府八幡宮ノカリ殿ノ中ヨリ火炎オヒタシク出テ、国府ノ家人等<sup>マカ</sup>燬之出来カト見程コソアレ、同日申時ツシマ西面サス浦二異国船四百五十余艘三万人計乗寄来云々、

一、就祈雨勝負事、或記云、文永八年辛未六月十八日より廿四日至マテ七日之内天下ノ仰ヲ蒙リ、極樂寺ノ良觀房雨ヲラスヘ□□披露アリ、聖人仰云、雖為小事、此砌以現証可顕法問邪正者也、其比周防公・入沢入道ト申念仏者有之、对之ノ玉様ハ、汝等ハ念仏者也、未信法花経、所詮以現証可知法邪正、若七日ノ内降雨、八斎戒念仏可往生淨土信之、不降雨一向可ト信法花経ヲ仰アレハ、二人大ニ悦ヒ至良觀房許ニ申様、日蓮御房ノ玉ヒ候ハ、良觀房日来ノ仰ヲ承及ヒ日本国ノ僧尼二八二百五十戒・五百戒・八斎戒等ヲ一同二持セント思廻ニ、日蓮此願ヲ障ル□時々嘆キ玉フト聞エタリ、若七日力内一雨毛降ナラハ、忽ニ御弟子ト成テ具足戒ヲ持、念仏無間業也ト云法門ヲ可申止ム之由ノ玉フヒ候ハ、如何申タリシカハ、良觀チノメニ悦之、七日ノ内二雨ヲラスヘシトテ、百余人ノ弟子ヲ集ヨセ、煙ヲ立テ声ヲ大ニ響シ、或念□、<sup>④</sup>

或請雨□、或法花経、或ハ真言、惣シテ小法大法無殘行之玉ヘ共、□驗毛無之、□至四五日二更以雨氣無之、又聖人遣使七日祈雨已ニ半過候、雨氣無之カラン、急キ遽ニ雨ヲフらし大旱魃ノ憂愁ヲ救玉ヘカシトアリシカハ、良觀房以外ニ迷惑シテ極樂寺・多宝寺等数百人弟子ヲ召集メ肝胆ヲ摧テ祈レ共、露程ノ雨不降、七日毛漸ク過シカハ、又聖人以使被仰様ハ、伝聞ク和泉式部ト云ヘル姪女、能因法師ト云破戒ノ僧、以三十一字ノ和歌ヲ雨降スト見タリ、良觀房ハ持戒人ソカシ、法花真言其義理ヲ極メ玉ヘリ上ニ慈悲深重ニシテ名称アリ、又一人二人ナラス数百人集会抽テ丹精ヲ玉フ処ニ、七日之内二雨毛不降、大以不審也、二百五十戒役拙也ト云共、狂言綺語ノ和歌ニ可劣之様ヤ有ヘキ、以之思之、一丈不越堀者二丈三丈ノ堀ヲ可越歟、祈雨ノ小事、不成就人、大事ノ仏道ヲ可成乎、如此七日ノ内及三度遣使責レシカ共、二七日雨不降、結句炎旱弥盛ナル上ハ風頻ニ吹人民嘆無限、サレハ聖人ヨリ自今已後日蓮誹謗シ玉フナヨ、所詮後世ヲ畏玉ハ、来リ玉ヘ、降雨ノ法ト成仏ノ法□□奉ント教、第二七日マテ御使アリシ時ハ、良觀ヲ初トシテ数百人弟子旦那等汗ヲ流シ声ヲ立テ皆悲泣シ云々、然間良觀房有道心忽翻邪ヘキ歟、不然者、隱身於山林ニ処敢テ無其儀、弥興邪見念阿弥之弟子行敏ヲ為使者構無尽ノ讒言、以書状処々ヘ訴之奉ント失結構セシコト不可勝計、然間文□<sup>⑤</sup>八年九月十二日之龍口御難、併由此等讒奏也、一昨日見□此□□、<sup>⑥</sup>

一、九月十二日御勘気事、御書云、平さ衛門尉大難トシテ数百人兵者二ト

ウ丸キセ○事シケレハ不書、行敏等ノ状如目録御抄、八幡大菩薩諫玉事、御書云、十二日ノ夜、武蔵守殿ノアツカリニテ夜半ニ及頸切シニ鎌倉ヲ出シニ、若宮小路打出○又馬ニ打乗テユ井ノ浜ニ打出又云々、四条金吾頼基ヘ御告アルコト御書云、御リヤウノ前ニ至テ○中務三郎左衛門尉ト申者モトニ、熊王ト申童子ヲ遣タリシカハ○さ衛門尉兄弟四人馬口ニ取付キ、コシコヘ龍口ニ行ヌ云々、其夜怪異事、御書云、江嶋ノ方ヨリ月ノ如クヒカリタルモノ、マリノ様ニテ辰巳ノ方ヨリ戌亥ノ方ヘヒカリワタル、十二日ノ夜ノアケホノナレハ○トカク返事モナシ、或記云、良久有テ兵者ノ方々以使者鎌倉腰越ノ子細ヲ注進ス、自鎌倉使者ヲ遣、腰越ヘ申下サル、様ハ鎌倉中ニ大ナル物怪共有之、日蓮房不可打由有之、両方ノ使七里浜ニ行合リ、依之其夜ノ死罪御延引アリキ也云々、或御抄云、九月十二日丑時頸ノ座ニ引スヘラレニキ云々、

一、依智奉移事、御書、夜見クカリナントス、メシカトモ、トカクノ返事モナシ、ハルカ計有テ云サカモ依知ト云所エ入ラセ玉ヘト申○自天明星大星下リ、前ノ梅木ノ枝ニ懸リ有シカハ○江嶋鳴トテ空ヒ、キ大ナル鼓打力如シ、明ヌレハ十四日卯時十郎入道ト申者来テ云、過夜戌時計守殿○日蓮弟子等鎌倉ニ不可置トテ、三百六十余人江口、皆遠嶋ニ遣ヘシ、籠ニ有ル弟子、其ヲハ頭ヲ刎ラルヘシト聞ク、サ□□□火ヲ付ル者持齋念仏者力計事也云々、文永十年十一月七日自武蔵前司殿下佐渡国ニ自判有之、委如御抄、依智六郎さ衛門アテ所也、十月

十日ニ依智ヲ御立有テ日数十二日越後寺泊着玉ヘリ、十月廿二日也、廿三日御抄ヲ寺泊御書ト云、トキ殿ヘ状也、寺泊ヨリ十月廿八日ニ佐土ニ着、十一月一日ヨリ塚原ト申一間四面ノ堂、上ハフカス、四壁アハラニ、仏モナシ、敷皮計、雨時ミノヲキテ居玉ヘリ、

一、御赦免状事、文永十一年二月十四日日付也、同三月八日二付日朗所持之、同十三日佐渡ヲ御出、同国マウラトカ云津ニ下玉フ、十四日ハ彼津ニ御滞留、十五日ニカシハサキニ着玉フ、十六日越後ノコフ、十二日ヲヘテ三月廿六日ニ鎌倉入玉フ、同四月八日平さ衛門尉ニ見参、同五月十二日鎌倉ヲ御出、同十七日ニ身延山ニ着玉フ、九ヶ年御隠居

一、身延御出ノ事、弘安五年壬午九月十八日、武州池上着玉フ、其路ノ次第事、九月八日身延沢ヲ御立有テ、其日下山兵ヘ四郎宿所ニ御トマリ、

〔愛コリ中山・紙戸等ノ高祖ノ御縁起書付タル書ヲ移也〕

九日齋藤入道ノ宿所一夜、十日ニ弥次郎宿所ニ一夜、十一日黒駒ニ一夜、十二日ニ河口ニ一夜、クレチニ一夜、十四日竹下ニ一夜、十五日関本ニ一夜、十六日ニ平塚、十七日ニ瀬屋、十八日午剋武州荏原郡千束郷池上ニ着玉フ、九月廿五日ニ鎌倉ヨリ法花宗上下御参有□、立正安国論ノ御談義有之、然大聖人仰云、我ハ三七日ノ内ニ可死ト玉フ、彼釈尊ハ四十五日ニ当テ涅槃スヘシト説玉フ、今ノ大聖廿一日ノ内ニ可死ノ玉フ、然処トキ入道日常上人申サセ玉フ様ハ、所詮王ト御生レ候テ、法花経広宣ル布サセ玉ヘト申玉フ時、大聖人ノ御返事ニ非情共有情共成事ニテサコソト仰有之、所詮如此仰奉安相似御書御文体有之、夫ト者観心本尊抄云、行撰受時成僧弘持正法ヲ、行折伏時八成



賢王誠責愚王等云々、概ソ此御書ニ相似セリ、其後種々ノ御法門被仰也、彼釈尊ハ三十成道シ、一代五十年ノ說法過キ、沙ヲ双樹拔提河ノ辺ニシテ御入滅アリ、我モ亦武州田波河<sup>(一)</sup>ノ可滅、其時堅牢地神身ヲフルフヘシ、以夫日蓮力死相ヲ可知被仰、又日蓮力墓所ハ身延沢ニ可立テノ玉フ、然シテ弘安五年壬午十月十二日、北向御座時、御マヘニツク一ヲ立、焼香散花ヲ致シ、釈迦像ヲ立進セ、同御本尊ヲ立進キ候ト申時、見上テ御覽シ、面ヲフラセ玉フ時、御弟子白蓮阿闍梨御筆ノ曼荼羅ヲ懸進セ候、此釈迦仏ノ方ヘヨセ、妙〇経ノ御本尊ヲ奉懸御前ヲ御覽有ニ後、十三日卯始ニ宗仲妻共ニ二人鎌倉ヨリ参テ、御枕下ニテ宗仲参リテ候ト申時、大聖人両眼ヲ開キ御覽有之、弘安五年壬午十月十三日辰刻、御年六十一ニシテ、武州田波河<sup>(二)</sup>ノ辺千束池上ニテ御遷化畢、然ニ大地六種ニ振動ス、種々ノ御供養、釈迦仏ノ御入滅ニハ梵天・帝釈・日月星宿・四大天王・竜神八部・人天大会恭敬供養ト成シ奉、今末法ニ於テ「一七字ヲ付属セラレ玉フ上行菩薩ノ垂迹日蓮大聖人御遷化ノ時、比丘々々尼等ノ四種最後ノ供養ヲ申也、同十四日ニ御葬送御遺言ニ任テ御舍利ヲ同廿一日池上ヲ御立有テ、其日ハ飯同<sup>(三)</sup>、廿二日ハ湯本、廿三日ハ車返シ、廿四日上野南条七郎宿所入参ス、廿五日甲州南部・飯野・牧三ヶ郷ノ内波木井ノ郷身延沢、本土寂光ニ御舍利ハ入参ス、同月廿九日、聖ミソキ御影ヲ造立玉フ、御弟子日法四十九日御仏事ニ御影堂ニ入参ス、御墓二百ヶ日ノ時御舍利ヲ納也、御葬送ハ同月十四日戌時御入棺、其時役人、越中公葬□、先

火次郎三郎云々、別紗ニアル間略末也、爰マテハ中山・真間何門中ノ聞書也、正本ハ浜土門徒ニ有之云々、御最後ノ釈迦像ヲ被立時、御面ヲフリ玉フ、其時興上御本尊ヲカケ御申時御入眼見タリ、諸門徒ノ存知歟、在世ノ釈迦末代非本尊コトヲ、其上墓所ノ傍ニ可立置云々、御葬送ノ次第異本可見合、

一、御遺物配分之事、弁阿闍梨日昭ニ御本尊一体・釈迦立像、大國阿闍梨日朗ニハ小袖一・御馬一疋、佐土公ニ御本尊・太刀・小袖一ツ・ケサ代五貫文、侍従公ニハ智満丸ト云御馬・御衣一・小袖一・ケサ、越前公ニハ福満丸ト云御馬一疋・小袖・頸ホウシ<sup>(四)</sup>・皆具<sup>(五)</sup>・御アシダ、白蓮阿闍梨日興ニハ御腹巻・錢二貫文、伊予阿闍梨日頂ニハ御馬一疋・小袖・手ホコ、蓮花阿闍梨日持ニハ小袖・衣・錢三貫文、卿公ニハ御馬一疋・小袖一・御念珠、筑前公ニハ小袖一・衣一・帷一、治部公ニハ小袖一・頸ホウシ、摂津公ニハ錢一貫文・衣一、伊賀公ニハ錢二貫文、淡路公ニハ一貫文、又寂日房ニハ代二貫文、信濃公ニハ二貫文、出羽公一貫文、帥公一貫文、越前公ニハ口貫文、但馬公ニハ一貫文、下野公一貫文、讃岐公二貫文、妙法尼御前ニハ一貫文・馬一疋・染物一・鞍皆具、宮土四郎大郎殿ニハ二貫文、藤内三郎殿ニハ二貫文、椎地四郎二小袖一、竜王ニハ絹、安房国新大夫入道殿ニハ小袖一、同國伊豆殿ニ御小袖一、同國義浄房ニ御小袖一、藤五郎小袖一云々、右遺物配分如此、此分大聖人由来伝記ニ見タリ、後伝記ノ広本中山・真間等有之云々、身延日朝モ上下二帖ニ御縁起ヲ被書タリ、日我先年諸御抄伝記ヲ引テ

二百丁<sup>(帖)</sup>ホトニ書立タル、籠城火事時焼失、無別本間不及力、用々計  
為旅中抜書之間、本文ハソラニ書所モ有之、殊急間損失可有之、以能  
本可有添削者也、

「上<sup>(異筆)</sup>」

御仏前」

(さとう・ひろのぶ 本研究科教授)